

「奥さま、何うかなすつたので御座いますか。」
 私は直ぐいつもの取すました顔をして、態と事も無
 げに、

「何、何でも無いの。遊びが過ぎてお金が足り無くな
 つたんだつて……お定まりさ。」

「左様でございますか、私もどうもお使ひの様子から
 何から可怪しいと思ひましたよ。」と聲をひそめて、

「それに旦那様は何でございますつてねえ……近ご
 ろ御酒の上ばかりでもゐらつしやいませんさうて……
 奥さま、私は何にも御存じ無い貴方がお可哀さうて

なりませんでございますよ。」

私は其言草がグツと癪にさわつた——賣色に見かへ
 られたと云ふことを他人に付度され、同情されるの
 が、如何にも自分と云ふもの、尊嚴を傷つけられるや
 うて。

「お黙りな、そんな事はお前の知つた事ぢや無い。私
 と旦那とは互ひに深く信じ合つてゐるのだから。」
 言ひながら私は筆筒の引出しへ手を掛けた、さうして
 取出したのは小袖一重ねに帯が一筋。これを質入して
 了へば、もう寶家へ着てゆく物も無いのである。

「これで二十圓貸すだらうか。」
 と獨言のやうに言つたが、松はたゞ目を圓くして黙つ
 てゐた。

(評) 反抗と云ひ自尊と云ひ、女主人公の近代的思想が面白い、而かも是だけの短い断篇の中に、女主人公の思想から感情、さては境遇までが具體的に畧ぼ遺憾無く現れてゐる、今の名ある自然派作家の作品中に交へても多く遜色はあるまい。

二 等 〇 年

岩代國 服部 貞子

澄江さんが結婚してから、彼れ此れ四月にもなるが
 噂はまだなかく納らない。澄江さんは名うての美人
 て、心立ちがよくて、そして仕度持ちといふ、たつた
 一人のお祖母さんの自慢娘、若いうちから、家が無人
 だから早く婿をくんと騒ぎ乍ら、廿二の今までも選り
 嫌ひして、質屋の婿にまさか大臣も来やしまいしと
 笑はれて居たお祖母さんも、夏の初めに軽い中風にか
 かつたので、今度は俄に急ぎたて、丁度持ち上つて
 居た縁談が苦もなく纏まつたのであつた。それは町は
 づれの塾近くに下宿してゐる、新任の英語教師武田嶺
 雄と云ふ人て。

何し狭い町のことで話はずと擴がつた。片野

の婿、塾の先生、何日々々の婚禮など、目差されて
 居た娘だけに、岡焼の話は尾に尾がついて傳つた。少
 くても六七人は集まる私等裁縫の座敷には、つひ此間
 迄並んでゐた澄江さんのこととして、日に／＼此話が繰
 り返された。みんながいろ／＼な事を聞いて来る。生
 れは東京で、眼鏡をかけた、口髭のある、立派な、ハ
 イカラな好男子といふことは、見た人も見ぬ人も話が
 一致した。

或日もまた此話をはじめつた時、芳ちゃんといふの
 がもの／＼しく聲をひそめて、「酒亂だつて！」と低語
 た時「オ、厭な！」と殊更眉を擡めたのは、此間誰やら
 が、わざ／＼持つて来た塾生一同の寫真を見て、「そん
 なに評判程の人でもないのねえ」と妙に微笑んだ牧さ
 んであつた。

牧さんは澄江さんとは大の大的の仲善であつた。い
 つも二人は針箱並べて、縫くらなどで私等妹弟子達を
 驚かせて居たが、澄江さんが来なくなつてからは、心
 の合ふ友達がない故か、いつも一人て淋しさを針を
 動かしてゐる。そしては時折妙に考へ込んでしまふ。
 けれどもこんな時に、例の澄江さんの噂が持ち上ると、
 俄に活々として、其話をしまふ。一寸悪口らしいこと

を言はれても、躍起となつて澄江さんの辨解をし
 いた牧さんは、「どんなに大切なお婿さんやら、澄江
 さんもお祖母さんも、下にもあかずに持ちやけて居る」
 など、憚んなこといつて笑ふやうになつた。

「武田さん、あんまり如才がなさ過ぎて……私め
 んな人嫌ひだ」こんな言も云ふ此頃は、繁かつた足も遠
 くなつた。けれども稀に見える澄江さんに對しては、
 矢張り親しい友達であつた。

「牧も早く何處か恰度したとこへ」とお母様なるお師
 匠さまが此口癖は、澄江さんの結婚以來やう／＼繁く
 なつて来た。するといつても「厭なこと！」と心持顔を
 赤くして、「お嫁になんかなりやしない、彼様に意久地
 がなくなるんなら」と、つと右の肩をあげるやうに動
 かすのが癖、「お嫁になると皆あゝなるのか知ら、随分
 強情だつたくせに、もう何でも彼でもハイ／＼言ふこ
 と聞えうるのだから此間言つてやつた、あんまりへい
 へいするのも善し悪しだつて……だつてあんな噂が
 あるんだもの足許見られるわ」人は婿其人を、片野の
 財産目當てに……などい言ひふらすのだ。
 「此間もひよつと怪しな話を聞いたし……私、いろ
 いろ相談したいことがあるんだけれど、結婚なつてか

ら此方、私になんか少とも打ち解けて呉れないんだもの……と針をかへして留めた糸をボキリと齒で切つて、「お嫁になると皆あんなのか知らー」とくけ臺をつとひきよせて軽い溜息をつく。「けども澄江さん不幸つて云ふんだわ、彼んな人の……」と悄然なつたかと思ふと、縫ひ縮めた針を手荒くこいて「彼の人つ位、女らしい女はないわねえー」女と云ふ語に力を入れて向ひ合つてゐる私と顔を見合せると、つと右の肩を動かして、ホ、と聲高に笑つたもの。

牧さんにはもと定まる夫があつた。遠縁の者で若いうちから臺灣に渡つて製糖のことをやつて居たのだが一昨年の夏、マラリヤ熱で死んだと云ふ報知が着いてから、何處ぞへ嫁らなければ、と言ひ乍らも、帯に短し襷に長して、昔氣質が師匠さんの氣に入るやうなのがなく、つひまた仕事の手助けになるのと、氣に入らない嫁に對して牧さんが意地に可愛く、一寸退れして、は、取つて廿四といふ今までも、處女の生活を送つて來たのであつた。

年は、牧さんが獨り身な以上、澄江さんとの友情に邪魔をするのだらうと私は思ふ。

（評）女性の微細なる感情を巧みに描いて居る、描き方も説明に陥ら

ず要は其膝を得て居る、女主人公が縫物をしつゝある光景の活躍してゐる點など、殆ど老手と云つても可い、唯英語のルビにいいことあり、聞いてを聞えてとするなぞ、地方説のあるのが疵だ。

三等 **秋色**

土佐國吾川 深瀬ます子
郡弘岡上

打續く小春日和の長閑さに大路行きかふ人の足並も自然と緩かである。

二人は電車を下りて、青山御所の前を左へ真直に、幽靈坂のとある富豪の別邸の裏門へ来て足を止めた。

男は若手ながら敏腕を以て、好男子を以て、其社會に知られた人、久しく獨乙に居た身でありながら西洋臭のが大の嫌で、何時も角帯に五つ紋といふ拵、それが少しも厭味つたらしく無く誰が目にも華族の若様とよりしか見えぬが、もし、其閱歴を聞いたならば、誰も誰も氏より育といふ事を今更の様に思ひ合せざるであらう猶其切て廻す腕前を見たならば如何に一世に勝れた才能を持って居るのに驚くであらう。秀た眉、力ある瞳、殊更ならぬ八字鬚、其口元には如何なる人に對した時でも豊かな微笑を含めて居る、其鮮な眉は心の落付を示して如何なる事があつても決して動く様な事

はなす。

従ふ少女はさる侍従の弟娘で名を萩子といふ。萩ならば白萩か、萩よりも高く清らかな姿は白百合か水仙とでもいふ所であらう。目鼻だち調ひ過ぎて表情に乏しい嫌はあるけれども、それが却て氣高くも見える。袴足すつきりと通つて、多過ぎる程見事な黒髪は靴かに結ばれて、大束なりレの造花が後襟に挿されてある。が、浮かぬ心は色に出て、何物か胸深く蟠つて居るのがいはぬけれども見える。

門には三つ四つ俵が止つて、邊は打水清らかに掃除が足りて居る。「さ入らう。」と男は萩子を見返つた。萩子は僅かに會釈した許、押開かれた柴折戸の内に五、十餘の男が羽織袴で控えて居る。見るより恭しく一禮して、「どうぞ此方へ」と手を以て示した。其所には茅葺の庵があつて、其前に幾足かの庭草履が奇麗に並べられて、二三人の男が下足番をして居る。二人は

草履に代へ飛石傳ひに二三歩左に曲ると、打開けた庭が見える。池を廻つて色よく染めた紅葉が燃えるやう。小船を浮べてたをやかに掉して居る少女等、それはさながら繪の中のものである。と思ふとあらぬ方に笑聲も聞える。茶人か俳人かお比布着て頭巾被つて木の間に縫うて行のめあれば、海軍服を着て、芝山に鬼ごつとして居る子供もある、床机に腰を下して小高い所に休んで居る奥様連もある。「おや貧様ようこそ」と高い聲がして後の庵から出たのは小丸に小紋縮緬の二枚重を召した少し肥満り肉の當家の奥様である。はあ、先夜は失禮——一寸お近を通りましたから——大變紅葉がよく染りましたね、「被入ました。」と萩子に一禮して、「丁度今日が見頃で、之で一兩参りますともう駄目で御座います——御歸りにはどうぞ宅の方へ御寄り下さいませし御待ち申して居ますから。」有り難う。」



はなす。

従ふ少女はさる侍従の弟娘で名を萩子といふ。萩ならば白萩か、萩よりも高く清らかな姿は白百合か水仙とでもいふ所であらう。目鼻だち調ひ過ぎて表情に乏しい嫌はあるけれども、それが却て氣高くも見える。袴足すつきりと通つて、多過ぎる程見事な黒髪は靴かに結ばれて、大束なりレの造花が後襟に挿されてある。が、浮かぬ心は色に出て、何物か胸深く蟠つて居るのがいはぬけれども見える。

門には三つ四つ俵が止つて、邊は打水清らかに掃除が足りて居る。「さ入らう。」と男は萩子を見返つた。萩子は僅かに會釈した許、押開かれた柴折戸の内に五、十餘の男が羽織袴で控えて居る。見るより恭しく一禮して、「どうぞ此方へ」と手を以て示した。其所には茅葺の庵があつて、其前に幾足かの庭草履が奇麗に並べられて、二三人の男が下足番をして居る。二人は